

社寺建築 及 臺灣檜材の安價提供  
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不  
充分なる檜材は干割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の特點

- 一、耐久防蟻
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整然木
- 六、水高染色

目 次

菩薩行に就て.....	本 多 日 生
社會改造の計畫圖.....	村 田 直 京
肺結核治療の秘訣.....	奥 田 史 郎
聖訓摘要.....	本 多 日 生
歡普賢經要譯.....	國 友 日 斌
外面的と内面的の生活.....	田 久 保 本 誓
猿龜物語.....	長 谷 川 義 一
南洋だより.....	田 中 宣 正
記事報導.....	

第三十三三年三月號

統 一

不許複製

昭和三年一月廿四日印刷納本  
昭和三年二月一日發行

(第三百九十五號)

統一廣告料			
表紙	一頁	金拾貳圓	前
一頁	拾五頁	金九圓	前
一頁	五頁	金四圓	前
四分	一頁	金五圓	前

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	送料共
一年	金貳圓貳拾錢	送料共

東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

編輯兼 國友日斌

印刷所 鈴木木日雄

東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 統一發行所

名古屋市東區千種町字五反田五二番地

編輯所 統一編輯局

名古屋市東區田代町字城山七十七番地

電話東京五一〇七一番

電話名古屋一〇八一九番



本多日生現下著書

(現在品のみです費切れのものには注  
文されても餘計な手数で困ります)

本 尊 論

布装 一部 金 七拾 錢  
送料 一部 金 四 錢

法華經要文

布装 一部 金 五拾 錢  
送料 一部 金 二 錢

法華經の行者日蓮

一部 金 一十 錢(送料共)  
廿部 金 一圓五十 錢(送料共)

修法勸行の心得

一部 金 十五 錢(送料共)  
十五部 金 一 圓(送料共)

教育勸語の思想問題

一部 金 廿 錢(送料共)  
十部 金 一 圓(送料共)

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引御照會下さい。

教

第二卷第十二號出づ

本誌執筆者

その堂々の各  
方名家の執筆

本多日生  
野田良治  
澤田節藏  
永井米藏  
岩野直英  
高島平三郎  
石田誠

毎月一回 十一日發行 一部金十錢

東京府荏原郡品川町南品川四二二

發行所 教發行所

(振替東京一〇九四〇番)

菩薩行に就て

本多日生

それから禪波羅蜜品第二十七で、即ち一心不乱といふことであるが、これも何もさうむづかしい事を云ふのではない。世間の事、出世間の事、心を打込んだ事は精神を専らにして行くといふことでなければ何事も成立つものではない。少しやりかけたけれども又氣が變つたといふのでは成功すべきものでない。

「禪定を離るれば尚ほ一切の世事を得ること能はず」茲を能く考へなければならぬ。禪定と言つたら達摩大師が壁に向つて九年も考へて居つたといふやうなことはかり持出せば、九年も仕事をしないで置いて呉れる家はありはせぬ、達摩は疾に養育院へ送られてしまふ、今日の時代には達摩の面壁九年は何のた

そくにもなるものではない。釋尊はそんな迂遠な事は言うて居らぬ。禪定を離るれば一切の世事を得ること能はず。世事とは世の中の事柄である、精神が動搖して居つたならば、自動車の運転手にもなれない。いちやないか、運転手は一意專注して行かなければ、ハンドルを握りながら「彼處に若い娘が通る」とこつちの方には蒲焼屋がある。……右を見たり左を見たりして居つたならば人を轢いてしまひ、直に罰金を取られるぢやないか、意を專注せざれば世間の仕事も出来はしない、斯う説いたのが禪定の教である。昔から言ふやうに坐禪をして居る頭に鳥が糞を喰つて、立つてしまふまでは用事があつても動けない、まだ今は卵で何時解るかかわからない……そんな事だ



けを禪定と考へたといふやうな迂遠な頭腦で佛敎を學んだが爲に、禪定といふことに就ても敬慕禮讃する心が起らないのである。人は禪定なかるべからず、運轉手と雖も心散亂すれば人を轢く、……成程さうだ……と考へて行かなければならぬ、況や一切衆生を濟度せんとする者がグラグラふらついてどうするか、一人の客を乗せて行く運轉手すら精神が大事である。況や一切衆生を大乘の船に乗せて行く船長たる者が精神の安定無くして如何にするかといふことを考へなければならぬ。「禪定は禪宗のやることで、法華の方は大鼓を叩いて居る」……そんな議論は全廢しなければいかぬ。

凡そ善い事といふものは必ず考へて起るのであるから、孟子も放心を求むるにありと云つて、人が修養を積まうと思へば、フラ／＼してあちらこちらに心が動いて行くのを引締める事だと説いたが如く、又「大學」の如めにも「靜にして而して後に能く安

次は般若波羅密品第二十八であつて、即ち智慧であるが、前にも申した通り、この智慧は上の方にければ佛にも近づいて居る等覺の智慧まで菩薩の般若波羅密多であるけれども、低い所を言へば大休世の中の善惡の相を知ることである。

「善惡の相を知り、世出世一切の聲論を知り、因を知り、果を知り、初の方便及び根本を知る」もの、善惡本末輕重を知り、世の中のいろ／＼の學問をしたりすることが智慧である。さうしてもの、原因結果を知ると言つて、のら／＼して居つた者はしきりに零落れる、能く働く人は成功するといふやうな原因結果を能く知るのである。さうして初の方便及び物の根本を知ると言つて、ものは必ず最初が大事である。苗にして腐るものは遂に實を結ぶことは出来ないのだから、苗を仕立てゝ行かうとするには、先づ土壤を拵へて種子を選んで蒔く、水が多くとはいけない、水が濁れてもいけない、日光が

し、安うして而して後に能く慮る、慮つて而して後に能く得——一切の事が成就すると説いて居るが如く、三昧といふことは必しも佛敎に限つたことではない、熟慮斷行といふが如く、大事を爲さんとする時は必ず熟慮するのである。だから佛は譬を擧げて、人が鏡を執つて事物を無すが如く、鏡がフラ／＼動いては役に立たない、鏡で物を映すのに、鏡がグラ／＼動いたならば何にも見えはしたい、水に月が宿らんとする時分に波立てば月は映らぬ、止水明鏡と申して波靜まれば月が圓く映る、人間の心も波立てば正しき者が映らないといふことを釋尊は教へたものである。鏡で商を見ようと思ふ時には鏡は正しく安定しなければならぬ。一切の事を映して判斷せんとする心は、鏡に譬へれば動かない曇らない鏡でなければならぬ。水に譬へれば波立たない穏かな水でなければならぬ。そこに禪定の必要がある。

當らなくてもいけないといふやうに注意する。さういふ風に物事の最初に成立つて行く方法を根本から考へて行く、これを般若波羅密多と言ふのである。それが爲には廣く如來の一切經を讀んで、自分の智慧を磨くが宜しい、第一は如來の十二部經を讀むこと、續ては一切の世論世事——世間の總ての事を學問をし經驗をして、能く邪正の道を分別する、これを智慧と名けるのである。倫理上の事も、社會上の事も、皆それ／＼に人間は智慧を磨き經驗を積んで行かなければならぬ、それが佛法の教ゆる所で、「佛法を信すれば世間の本などは讀まぬで宜い」……といふものではない、釋尊が如何に堂々として人類の文化を啓發するお考であつたかといふことは能くわかる。先づ一切經を讀め、さうして廣く世の書物を讀め、一切の世事にも通達せよ、さうして大智見を開いて衆生を濟度せよ、斯ういふのである。斯の如くに布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧



といふ六つをやるのが佛法に於ける菩薩行であつて、要するに在家出家の二つがある。出家は菩薩行に入り易い、在家は困難だけれども、併しその在家の人がやるのが最も大切であると言つて、在家菩薩行を奨励せられた。その時にこの説法を聞いた人々は皆喜んで菩提心を發し、それだけの決心をして釋尊にお禮を申上げてその席を去つたといふことになつて居るのが優婆塞戒經の終末である。

斯ういふ風に考へて見ると、六波羅密の行と言つてもさうむづかしいものではない、非常に能く整頓して居る。尙ほこれを能く研究するには六度集經といふお經があつて、佛教の六波羅密に關する思想の全部が集められて居る。その中に六波羅密に就ては根本の精神から、實際のやり方まで一切が詳しく説かれて居る。これに基いて更に研究をして見ると一層この精神が明かになる、その他まだ菩薩行のみに就て説かれて居るお經も多い、一切經は殆ど菩薩行

り、大菩薩もある譯で、各々その人に依つて違ふのであるから、成佛の出來るといふことは、信心が因になつて善い事をしようといふ決心があれば出來るけれども、成佛さへすればモウそれで宜いと言つて、自ら現在生活の中に光を顯さうといふ決心を打捨てさせるといふことになつたならば、非常な間違つた事である。成佛は出來るときまつても、更に功德を多く積んで立派なお土産を持つて成佛しようといふことにならなければならぬ。成佛ばかりが佛教の目的ではない。それは最終の目的であるけれども、信仰を發したその日から人生の悩みを除かれ、いろいろの苦痛と罪惡を除かれて、今までありし様々の苦悶や迷ひから解脱して、さうして今まで有つて居つた幾多の生活の缺陷を除いて、次第に人格を完成して、最も愉快なる、最も幸福なる、最も價值ある人生をつくり、最も人格高きものとなつて、さうして親子、兄弟、隣里、鄉黨、往いては全人類の間に多

の説明と言つても宜いからである。華嚴經に善財童子が南に向つて善知識を求めて一つ宛の菩薩行を聽いて巡つた。何がこれ菩薩行なるかといふ問を出しては、一人の人が斯ういふ事だと教へて呉れる。併しこれは菩薩行の一端を説明したのみで、更に斯ういふ人があるから、行つて聽けと紹介して呉れる。又その人の所に行き、斯くして百八人の善知識を歴訪して善財童子がいろいろの話を聞いた。その百八人は悉く菩薩行の一つ宛を教へて居るので、何んが是れ菩薩行といふ問題に就て説明を與へたものである。或は又守護國界主經の中に三十二種の菩薩行を分解して説明されて居る。それ等もいろいろ研究をして見て、あまり人生に行ひにくいやうなことは、五十二段の上の方の菩薩に移して切棄て、も宜いが、實際可能な現實の生活に効力あるものは、これを能く消化して實行して行くやうにしなければならぬ。世の中には小さい菩薩もあれば中菩薩もあ

大の効果を及ぼして、末は佛にまで成つて行くといふことが大乘菩薩行の根本精神である。更に六波羅密の意義に關して詳細なる考察を遂げて置きたいこと、いま一つは菩薩行の方便即ち菩薩行を實際に運用して行く、活きた菩薩行とは如何なることかといふ點に就て申述べて置きたい、即ち六波羅密の内容を正確に領解し、菩薩行の運用を明瞭にして置きたいと思ふのである。菩薩行が佛教修行の全体であるといふ意味合は、本講の最初に詳しく申述べた事である。さうしてその菩薩行の内容は第一に發心であつて、發心は自ら菩提を求め、成佛をしたいといふ欲求であるが、その成佛をしたいといふことは、唯だ自分だけが助りたいといふことではなくして、もと／＼多くの人を救ひ導きたいと思ふけれども、自分の力が足らない、爲すべき事だけは人生に於て爲すけれども、それは甚だ微弱なものであるから、最後は先づ自ら成道を



遂げて偉大なる力を有し、生命の無限に達してさうして大活躍をしなければならぬ。即ち衆生済度の大願の爲に自ら成佛せんとするのである、自己の爲に成佛を求めぬ心よりも、衆生済度の爲に成佛せんとする精神の方が強い意味に現れて居るのが菩薩の發心である。

その事は心地觀經等に頗る明瞭に説かれて居るところであつて、眞宗の親鸞上人すら「願作佛心を即是れ度衆生心なり」といふ言葉を引用して居る、これは親鸞の言葉ではない、佛に作らんと願ふの心は即ち衆生を度せんとするの心であるといふ名句である。それは菩薩の發心を簡單に言ひ表したことで、自ら佛に成らうと願ふ心は、同時にそれは衆生済度の大願を包含して居るのぢやといふことが佛敎信仰の出發點であつて、それを簡單に發心と申すのである。この發心を辿つて行けばどうしても直ちに必要な事は信心である、信心は一つは佛の力を信じ、一つは

諸の慳貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛んなる者には忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸の散亂の者には禪定の心を起さしめ、愚痴多き者には智慧の心を起さしむ。

と説かれて、これが六波羅密を極く簡單に纏めたことになつて居る。慳貪と言つて物吝みをして、義理も人情も辨へないといふやうな我慾の精神に居る者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者と言つて、慢心の心に囚はれて居る者にはそこに戒律を持つ心を起さしめるといふ風に、この無量義經に説かれた所を考へれば、菩薩行と言つても何もむづかしい事でもなければ又さう面倒な事でもない、世間でも心得なければならぬ事である。苟く佛法の信心をするといふ和いだ心になる以上は、左様な慳貪の心、憍慢の心、殺戮の心、瞋恚の心、懈怠の心、散亂の心、

自分の力を信じ、もう一つ加へれば佛の敎の正しきを信するのであるが、さういふ信心といふものが他に迷はされない、動轉されない、確乎不拔の精神が確立して居ること。その信心と同時に起るものが即ち悲心と申して、慈悲の心であつて、自分が左様に佛を信じ、自己を信じ、敎を信する所以は、自ら救はれるのみではない、同時に人を救はんとするの心を満すものであるといふ意味がそこに動いて居るのが悲心である、佛敎の信心は悲心と一体なる信心でなければならぬ。願作佛心は即是れ度衆生心といふのも、信心は即悲心なりと言ふのも同じ意味に現れて來るのであるが、さういふ風に菩薩の發心は信心と悲心となつてはたらく、その悲心がいふ少し擴げられて活躍すれば即ち六波羅密の行に進んで行く譯なのである。

その六波羅密を簡單に言へば無量義經の十功德品に或は愚痴の心といふやうなものはそれを誦して、それに代るべき善き心を以つてするといふことに努めなければならぬ、それが即ち六波羅密であるといふことであつて見れば、菩薩行といふものは簡單に佛法信仰の心得としてさうしても必要なくべからざる事で、何も面倒な事を言つて居る譯ではない。

併しそれは簡單に考へる場合の事であつて、その布施、持戒等の六波羅密の意味合を鮮明にし、且つそれを擴大して行けば、一切の善根功德は六波羅密に包括されるのである、その極く簡略なる方の意味合と、それを擴大すれば如何なる善根功德も包括するといふ意味合と、兩方を知つて居らなければならぬ。前回にもその六波羅密の簡略の方は説いたのであるが、菩薩行は唯だ楽なものだ、斯ういふ僅かな意味合だといふ方だけを知つて、それ以上に進むことを知らなければ、完全に菩薩行を理解したものと云へない。先づ簡略な方をお話したのは、いき



なり菩薩行といふことを聴いてびつくりして引込んでしまつてはいかぬから、びつくりしないやうに言ふので、だん／＼思想が向上して来れば、進んで自分の善根を爲さなければならぬ。今日の佛教徒見たいに「善い事をせよ」と言つたら、いきなり門口から逃出してしまふといふやうな、そんな懦弱な附甲斐ないものを以て正機となすべきではない。出来な事事は仕方がないやうなものだけれども、物事は志を立て、行けば次第に成立つて行くといふ所に、教の尊さもあり、人間の價値もある譯ナンである、それを唯ビク／＼して、易修易行といふやうなことでごま化されて行く思想は大禁物である。それは昔の人も皆な言うて居るので、孟子も「盡つて進まず」と言つて、自ら自分はモウそんなむづかしい事は出来ないと言つて締めてしまふことを非常に慨嘆して居る、それは自暴自棄といふもので、俗にやけくそといふ振假名を附けるくらゐで、甚だ宜しくないこ

とになつて居るのである。道德や宗教で最初からびつくりさせて、「逆もいかぬ」といふやうな性え根性を與へるのは甚だまづいことになる。その事は孟子が射と云つて、弓を引くことを教へるに就いてその話をして居る、羿といふ弓の先生が始めて入門する者に教へるのに、あの的の真中の黒星を射よ、的から外れては逆も問題ならぬが、的へ中つても端の方ではいかぬ、真中の黒星を射抜かなければならぬと言つて教へるといふ、そこで側の者が「先生そんなに今日始めて弓を習ひに来た者に真中を射よと仰しやつても無理です、まア最初の中は何處でも宜いから的に中りさへしたら宜い、やつて見ると仰しやつたら宜いではありませぬか」と言つた時に「いやさうではない、最初の人に教へる事も上達した人の心得る事も、弓の心得は一つのものである、最初は何處でも宜いからやつて見るといふやうなことは射を學ぶの道でない」と言つた、

ちようごその通りであつて、どんなえらい人が守つて行く道も、つまらない人が行く道も道に二つあるものではないといふことを孟子が説いて居る。然るに佛教徒がい／＼の道を立て、間に合せなごま化しの議論を立てたといふことは、教を立てる原則に於て既に許されないことになると思ふのである。教育勅語にもある通りに、「斯ノ道ハ實ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通ジテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス、朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ、咸其德ヲ一ニセンコトヲ冀フ」と仰せられた、天子様も一般人民も、昔も今も、内も外も皆な一つのものを買いて行くといふのが、道德宗教といふものを立て、行く原則である。「俺はこつちへ行くお前はそつちへ行け」お前は二階に上れ、俺は様の下へ潜込む」といふやうなことを言つて教がごま化されると思つたのは、頗る道德宗教の教を立てる根本精神を失つて居る。今の孟子

が言つた弓を引くことを教へるに、始めて習ひに来た者にも的の真中を中てなければいかぬ、外へ中つたのは駄目だと言つたと同じやうに、道といふものは教へて行くべきものである。それであるから佛教の六波羅密といふことは、どんな初心の者にも教へて宜いのである、その初心の者に驚かないやうに教へるには、今申した「諸の慳貪の者には布施の心」といふやうな簡單なことから教へて、さうして次第にそれを擴大して、どんな大きな善根功德も菩薩行に依つて説明されて行くのである。であるから菩薩行の位には低い所から高い所まで五十二の階段が立てられて居る位のことである、どんな低い所にでも、やはり菩薩行として考へて宜い譯である。その意味に於て今日は六波羅密の内容を説明をして、ごういふ事がその精神であるか、今の無量義經に説かれたやうな事であれば、布施とは慳貪の心を誡めるといふ一つの事に限つて居るやう



な狭い意味にもなるから、その狭い意味でも布施であるけれども、モツとその意味を纏めて十分に理解し得るやうにお話して置きたいと思ふのである。

いま一つは、法華經は一乗の教として世間出世間を貫いて行くものである、宗教を實際化したものとして尊崇されて居るけれども、經文の上に於ては法師功德品に、

若し俗間の經書治世の語言資生の業等を説かんとも皆な正法に順せん。

といふ簡單な句があるのみである、世間の道德の事柄も、政治の事柄も、經濟生活の事柄も、その他いろいろの人生の實際生活の事柄が、皆な正法といふ佛敎と一致して行く、世間と佛法和解れないといふことを「皆順正法」といふ四字で表してあるきりで、ごういふ具合にそれが順應一致するかといふ意味合に至つては甚だ簡略に失して居るのであるが、併しこれは一番大事な教義であると思ふ。それは同じ法

華部の大薩達經に行く、その世間の事柄が佛敎と一致するといふ意味合を事細かく説明をされて居る、同じ法華部であつて、その意味合を詳細に敷衍せられて居るお經に依つて調べるといふことが大事である。それが一言にして言へば、菩薩行の方便即ち菩薩行の應用といふことである、その中から日蓮聖人の立正安國論も出て来るし、日蓮聖人の一代の世間化したる實際的活躍といふものも導かれて居るもので、その原則がわかつて来る。吾々が菩薩行に志しても、やはりいろいろの職業を通してその中に菩薩行が活躍して行く、在家菩薩の實際といふものが説明されて行く譯である。それが菩薩行の方便波羅密と申すのである。

て居る嫌ひがあるから、これは大薩達經等を以て詳細に説明する必要がある、その點をお話しようと思ふ。六波羅密の内容に關しては澤山のお經に依つて研究する必要があるけれども、それは復雜になることであるから、六度集經といふ六波羅密の事を集めたお經に依つて御紹介して置かうと思ふ、この經には詳しく六波羅密の事に關して説明されて、その實例などを澤山擧げてあるが、枝葉の點は切棄て、要點を申すのである。

そこで最初に六波羅密の定義に就て、六度集經に説明されて居る所を御紹介して置きたい。

第一の布施に關しては斯ういふ意味を説かれて居る、布施と言つてもたゞ金錢を施すといふやうな意味ではない、先づ人物を養成すること、ちようご今日志有る人が學資金を供給したり、或は學園を建てたりして子弟を教育して人物をつくる、それが爲に心配もし、勞力も棒げ、又費用も支出の途を講じ

てやつて居るといふやうなことが、布施に就て一番大事なことゝされて居る。乞食に物をやるとか、葬式の場合に赤飯を竹の皮に包んで施すとか、さういふ無定見なことだけが布施ではない。理想を立て、人物を養成して行くこと、それから世の中の不良な分子、今日で言へば不良少年とか不良青年とかいふやうな墮落して行く者を、墮落しないやうな方法を講じて行くこと、それが爲には或は職業を授けたり、或は教誡を加へたり、今日の感化院のやうなものを拵へたりして行く事柄がやはり布施行である。又善い方で言へば賢い人、立派な人のする仕事を養成して、その事業を完成するやうに援助して行くのが布施である。さうして大勢の世の中の人を護り救ふこととの事業——所謂宗教事業とか社會事業とか教育事業、慈善事業といふやうな事柄は皆な布施行の志有る者が協力して爲すべき事である。さうしてそれを唯だ小さい範圍に考へてはいかぬ、本當は世界的に



さういふ事業は進めて、ちようど赤十字の事業のやうな意味にして、一地方に區域を定めずして、地球上の積かん限り、人の住む涯の涯まで救済の任務を及して行くのである、即ち人道的に大きな濟度の精神である。それは又地上ばかりではない、若し海に棲息するものがあれば——船の上に始終暮して居るといふやうな人達までも救はなければならぬ。さうして餓えたる者には食を與へ、渴したる者には飲物を與へ、寒き者には衣、暑き者には涼しき方法、病には藥、道行く者には馬、車、船といふやうな交通に就ての苦痛を除く方法を講じてやること、その他何事に依らず世の缺陷を補正するが爲に、自分の勞力なり、智慧なり、金錢なりを施して行く、その根本精神は、親が自分の可愛い子供を世話をするやうな心持でなければならぬ、さういふ精神が布施行であると説かれて、それを原則としてある。

それからそれを敷衍して更に非常に詳しく意味合、

間、或はのらうらして面白いことをして居らうといふやうな恠逸な人間、さうして困つて來れば嘘を吐くとか、人の物を盗むとか、又人を煽つて、世の中に間違ひを起させるとか、自分は働かない癖に人が働いて成功するのを見て恨み、嫉む、時に依ればさういふ間違つた精神から、親しき人、或は親でも女房でも殺すとか、或は又えらい人をも傷け、佛様を罵り、世の人の大切にするものも打壊すといふやうな、さういふ罪惡を世に行はしめないやうにする力を養つて行くことが必要である。さうして人皆な佛を信じ、宗教の信心をもとにして四恩に報答する、所謂父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩といふ恩義に感謝するやうな人生をつくり上げるといふ努力が、菩薩行の戒波羅密であると説かれて居る。

さうすると爲すべき範圍が非常に廣くなつて來るので、これはたゞ宗教の内部に於てやる仕事ではない、國家の經綸、社會の建設といふ上に於て、政治

及びその實例等を擧げてあるが、今申したゞけでも唯だ慳貪を斥けて……といふだけの事ではない、廣く人物を養成するとか、一切の世の中の社會事業、救済事業などが布施行に依つて完成されるといふことが能くわかると思ふ。

それから第二の持戒はさういふ意味かといふと、これは先づ以て狂暴なものを諷めて、世の中に慘虐を行はせないやうにして行くことが肝腎である、強盗とか殺人とか、世の不良なる暴動を抑壓し、鎮靜して、漫りに人の生命を殘害しないやうにして行くことが戒律の根本精神である。自分が腹が減つてもお粥を食つて辛抱して居るといふやうなことではない、積極的に世の中の狂暴なる者を抑へて、撞に害惡を起さしめないやうにするといふことが佛教徒の願望である。

それに引續いて起るのは人格が頽廢して、仕事をしないで遊んで美味い物を食ひたいといふやうな人  
 家なり社會の勢力あるものが菩薩精神を起して、その中に働いて行かなければならぬのである。であるから菩薩といふのは唯だ坊主だけではない、政治家に斯ういふ菩薩精神があれば、それが今言ふやうな社會の害惡を匡正するはたらきを生じて來るのである、そこに佛法は菩薩行を獎勵して居るのである。唯だ地蔵様のやうなのが菩薩であるとばかり考へて居るといけない、實社會に今言ふやうな貢獻をして、効力のある、人生に適したる菩薩行を盛んにしなければならぬ。今までの佛教の研究はあまりに考が淺過ぎた、菩薩と言へば變なものを考へて、人間の世の中から遠かつたやうな事ばかり教へたのは非常な間違ひである、他の世界に住んで居るものであつて、人生に對してははたらきをしない間拔菩薩……さういふものではないけない、人生に實際効力のある働きをしなければならぬ、それが戒波羅密の根本精神である。



第三の忍辱はごういふ事かといふと、これは忍耐力であるが、それには人間の弱點を能く知らなければならぬ、人間の弱點といふものは慢心が非常に強いものである、如何なる場合にも他人よりは自分がえらいといふ風をして見たい、本當にえらくはないけれど、えらいやうな顔をして見たいといふ慾望がある。だから貧乏人でも綺麗な着物を着る、綺麗な着物を着るだけの金銭は無いのだけれども、あるやうな顔をする、何にもわからぬでも知つたやうな顔をする、さうしてそれをえらくないやうに他人が言ふと腹を立てるやうになる、それが人間共通の弱點である。だからこの慢心といふ問題に就ては餘程警戒をしておくらなければならぬ、殊に役人などは殆ど慢心を生命として生きて居ると説かれて居る、さういふものに接する時には餘程注意をしないと、いろ／＼そこから間違ひが起つて来る。さうしてその慢心といふものは二つで終るものではない、慢心が嫉妬となり、曠恚ともなりいろ／＼に變形するもので慢心といふものは實に危ぶない、爆裂彈のやうなものである、物に觸れればごつちへでも爆裂する、「ア、口惜しい」といふやうなことを言ふのでも、やはり慢心の鼻を折られたといふやうな時に出て来るのである、殆んど狂氣じみた事である。それ故にさういふやうな精神を有つて居る者は、世の中にいろ／＼の間違ひを起し、罪惡を犯し、死んでは三惡道に墮ちなければならぬものである、普通の人間は多くさういふ生活を辿るものであるといふことを、菩薩行に住する者は見極めを附けなければならぬ。さうしてさういふ仲間と同じやうに行けばその行先はきまつて居る、仲間同士で腹を立てたり、いろいろ氣まづい、思ひをして一生を暮した揚句にドサンと惡道に墮ちる、あまり善い仲間ではないといふことを、菩薩行に入る者は能く見破らなければならぬ。それを佛法を信じて居つても同じやうに高慢の鼻が

突張つて居つたんで佛信者に成れない。それに就ては深く自覺をして「曠然として嘆す」とあるから、あゝ世の中の人といふものはつまらない所に慢心を起している／＼間違ひをして居る、如何にも情けないことだと深く／＼それに就て憤嘆しなければいかぬ。一つ間違へばそれが爲に國を亡したり、家を壊つたり、身を危ふしたり、一族を滅すといふやうなことも起るのである。さうして死しては三惡道に墮ちるやうな罪までもつくるのであるから、考へれば恐い事である。併しそれは刃辱波羅密に依つて精神の修養をすれば、さういふ禍ひが悉く除かれて、憍慢の反對に慈愛の心が起つて来る、忍辱の精神にはあゝ可愛さうなものだ、憍れなものだといふ慈愛の精神が起つて来る。であるから忍辱心は憍慢を滅め、慈愛の心に活きることが中心である。

が嫉妬となり、曠恚ともなりいろ／＼に變形するもので慢心といふものは實に危ぶない、爆裂彈のやうなものである、物に觸れればごつちへでも爆裂する、「ア、口惜しい」といふやうなことを言ふのでも、やはり慢心の鼻を折られたといふやうな時に出て来るのである、殆んど狂氣じみた事である。それ故にさういふやうな精神を有つて居る者は、世の中にいろ／＼の間違ひを起し、罪惡を犯し、死んでは三惡道に墮ちなければならぬものである、普通の人間は多くさういふ生活を辿るものであるといふことを、菩薩行に住する者は見極めを附けなければならぬ。さうしてさういふ仲間と同じやうに行けばその行先はきまつて居る、仲間同士で腹を立てたり、いろいろ氣まづい、思ひをして一生を暮した揚句にドサンと惡道に墮ちる、あまり善い仲間ではないといふことを、菩薩行に入る者は能く見破らなければならぬ。それを佛法を信じて居つても同じやうに高慢の鼻が

建國紀念講演會

第二千五百八十八年

主催 千葉縣下野本  
法華宗寺院一同  
日蓮聖人は佛法漸く頹倒  
しければ世間又亂れせり  
佛法は体の如く世間は影  
の如し、体曲れば影斜な  
りぞ申されました。  
私達は紀元節に當り建國  
の精神に起りませう、人  
道の爲に、世界の恒久平  
和の爲に

- 開會場所 講 師
- (貳月拾壹日)
- 夜七時 千葉市本町(武田顯龍師)
  - 同 本町(波邊義準師)
  - 同 千葉郡白井村(早切信榮師)
  - 同 中野郡本郷寺(海老澤信榮師)
  - 同 市原郡姊崎(小林智道師)
  - 同 町(妙經寺)今井俊貞師
  - 同 君津郡本更津(武田顯龍師)
  - 同 町(成徳寺)會 曉師
  - 同 長柄小學校(鶴澤泰正師)
  - 同 長生郡(星野純義師)
  - 同 二宮小學校(宮川光永師)
  - 同 長生郡東郷村(秋葉日敬師)
  - 同 七波 龍溪寺(中村決お師)
  - 同 日富郡本郷村(秋葉日敬師)
  - 同 長生郡本郷村(中山賢勇師)
  - 同 山武郡大網町(栗原顯有師)
  - 同 運 田 寺(木村令快師)
  - 同 山武郡龍岡村(野老純一師)
  - 同 上谷 飯島寺(石井信顯師)
  - 同 北ノ幸谷妙經寺(山形英應師)
  - 同 山武郡東町(岡時英昭師)
  - 同 鴻津 東漸寺(高貫賢師)
- (參聽歡迎)



# 社會改造の設計圖に就て

村田直京

過去の長い人類の歴史は凄惨を極めた歴史と云つても差支あるまい。掠奪、戦争、疫病、飢饉、又は壓政者からのあらゆる忍従を強ひられた苦闘史である。従つて人類は絶えず安息所を、求めて息まなかつた。遠い昔の希臘の時代から今日に至る迄、人類が理想郷を夢みて來た事や、宗教の説く未來界への信仰に慰められて其日を過して來た事によりてもよく知られる。

現代に於ても人類は矢張り理想郷を求めて息まない。特に近代物質文明が進歩して來ると共に、そして他面人類一般の智識が發達すると共に、社會に存在する不合理が一層人々の心に痛感される事になつて來た。宗教の説く未來界は權威を失つて來てゐる。

吾々人類が理想社會の實現を焦慮してゐるのは事實である。従つて之等の運動が眼前に展開された時に單に一部分の人々の運動として無關心に處する事は許されなくなつて來てゐる。其人達が改造せんとしてゐる其社會は矢張り吾々が住んでゐる社會と同一社會であるからである。

現代の社會改造運動を求めてゐるものは社會の平和安寧と經濟費の豊饒との二つである様に思はれる。階級的國家の廢止、資本主義の絶滅、世界平和の確立、社會的正義の確保婦人解放、工場管理、又生存權の承認之等は皆な言葉を異にしてはゐるが結局之等社會改造の諸主義は其中心點を「幸福ある社會」の實現と云ふ點に置いてゐる事は些々の疑もない。又其運動に携はる所謂闘士諸君が崇高なる目的達成と云ふ其動機と眞剣なる態度と活動に就いては敬服の至りである。

動機も可い態度もよい更に其手段に於て當を得て

人は未來界に希望を置かぬ、唯問題は現在に於ける理想郷の實現のみだ。

暴虐者や搾取者の存在せぬ國、總ての者が働いて、總ての者が均等に富める國、幸福が總てに行き渡る國之れが理想とされて社會改造論や其實現運動が現實に著手され來つてゐるのが目下世界の狀態である。

プラトンやモーリス、カーベエ達の夢に描いた理想郷は單に新社會の設計圖をして之に樂しむなら左程論するにも足るまい。併し現代に於ては社會主義とか産業革命主義、無政府主義、社會民主主義等々と無數の理想社會建設の設計者達が單に設計圖に満足せず進んで之が建設の實行手段に著手し現に日々其目的實現の運動が熾烈を極めつゝある狀態である。

あるならば一層よからうが。私は之等個々の改造論を批評し又は其改造案の根底に横つてゐる人生哲學を詳論しようと思はぬ。

又それ丈の余白も與へられてゐない。唯問題が今日に單に机上の設計としてではなくそれが現實に建設に著手されんとしてゐると云ふ事になると、矢張り吾々も又將來其社會に住む者たる運命を有するからには其設計に對して吟味させて貰う丈の權利も有り又義務もあらふ。

問題が吾々が住んでゐる現代社會を又將來住む可き社會を、改造し建設してやらうと云ふのであるから、先づ將來住ませて頂く其社會建設の設計に對して吾々としては輕々しく賛否を決してはならない。入念に其改造案を吟味させて貰ひ又卑見をも参考に供して貰う權利がある。

先づ此等の設計者が現代社會の改造する可き缺陷として認めてゐる點を擧げて見るに、富や機會の不



平等労働と資本との衝突、経済的及政治的特權の少数者の獨占、婦人の不合理な束縛、戦争貧困、失業者に枚擧の暇のないほど多くある。そして社會改造設計者の根本的思想は之等の缺陷乃ち社會惡と云はれてゐるものと及現代社會を形成してゐる個々人の精神的又は道德的缺陷に基いて居るものでもなく、又教育や時代の人生觀に基くものでもなく全部又は少なくとも大部分は現代の政治的及び經濟的の起因するものと假想してゐる。従つて其改造案が之等の缺陷を除くためには先づ缺陷の基因たる政治的及經濟的の制度的改造を目標として新社會建設の設計を描いてをるのは當然である。

従つて營利主義や富の不平等な分配、教育の機會の偏頗や國際間の戦争等の社會惡が存在し得ぬ様に社會を改造する事、更に之等社會をば禁止の形式で變革する事と提案されてゐる。之等の諸制度さえ變革れば、又之等の諸制度を變更する法律さえ制定

されば、それで萬事が解決され理想社會はたちどころに實現さるゝものゝ様に考へられてゐるかの様に思はれる。

確かに現在の社會には改造されねばならぬ缺陷が随分多くある。之等の惡は是非とも訂正されて、もつと吾々の住よい幸福な社會の實現される事は誰しも希望してゐる。

若し現在の社會惡が單に富や機會の不平等や政治的の制度に起因してゐるものならば、之等を改造すれば改造され得るものならば理想社會は忽ちに建設され得よう。

併し先づ第一に疑問を起さねばならぬ點は現代の社會惡は主として政治的や經濟的の點のみに原因を有してゐるであらうか。若し社會惡の病原が他にあれば、丁度病氣を間違つて誤つた投藥をしてゐる様なものでいくら努力しても其病氣の治癒法は無効に歸する事になる。

次に之等の病原が其主張通りであつたとしても、其設計者の主張する様に早急に治癒し得るものが如何、あまり急ぐと反つてそれよりも一層重大な餘病乃ち他の社會惡を生ぜしむる事になりはしないか、換言せば富と機會の平等が其人達の設けに従ひ改造された所で果して其實現の時人類は幸福な生活を送り得るか如何。

將來建設さるべき理想社會はありのまゝの人間性を有してゐる人類が生活し活動し得る社會でなければ必ずや又折角建設した社會を自らが破壊す様な事になり、輕率な設計は多大の努力と資本とを浪費する事となり、又文明の進歩を遅滞せしむる事になる。換言せば將來の理想社會建設の設計は人間性に關する確實なる基礎に基いた改造案たる事を要す。

右の様に考へると將來の社會改造の設計は心理學的の見地及び社會學の見地とでも云ふ可き廣い見地に其設計の基礎を置かねばならぬ様に思はれる。

人類が眞に幸福な社會を求めて焦心してゐる事は疑ひない。しかも人類の要求する所は複雑である。現在の社會改造案が目標としてゐる諸事實は確かに人類の要求してゐるものである。従つて社會理想としては價値あるものであると同時に他面其れが必ずしも最高價値あるものと斷するわけにはゆかぬし、又現代が最も缺乏を感じてゐるものとも斷じ得ぬ。現在の改造運動が擧示してゐる社會惡は確かに存在してゐる。そして其の事は吾々にとつては不幸な事であると共に、又之れに劣らぬ社會惡が他面に存在してゐる。藝術、道德、宗教心、教養、友愛、協同、勤勉、節制、健康、知識教育の合理的組織等に於ける缺陷である。之等は人間の複雑な要求の項目に入る可きものである。

此等の點から見て現代の理想社會設計案があまりに人間活動の一方面たる政治的及び經濟的のみにのみ基き計畫されて、其他の方面が監視される時其計



畫は失敗に終り結局人類には何等の幸福をもたらす事なく又かゝる計畫は成功の影が薄く悲惨な人類史に更も悲惨な一頁を加うるに過ぎない事になるであらう。

現代は經濟や政治の威力を發揮してゐる時代である。吾等が稍もすれば其力を過大視する傾向がある。従つて考方も經濟的及び政治的觀念にのみ支配され其等の關係のみを重視し人間の動機、人間の性質を無視し勝ちである。理論として立派でも強大な人間の心理的因素を無視する所、それは空に樓閣を描くの嘆を見るに終らん。

將來の理想社會建設案は現實の人間をあまりに理想視して計畫されてはならぬ。人間が樂天的である事は禁物である。富が増大され分配が均等化さえすれば社會悪が解決されると簡單に斷定されてはならぬ。しかも其富が質的ではなく量的に見らるゝに至つては更に不可である。

働、機會等の如き抽象的概念ではなくして多數の有力な本能や關心に衝き動かされてゐる人間でなければならぬ。

人間が眞に求めてゐる所のものは自己實現し自己實現は力強い複雑な本能や關心の働が社會關係に於て表現される事を意味してゐる。人間の自己實現は本能的活動の生活に存する。此點に於て將來の社會改造の設計は甚しく不自由な且つ個性を無視した性質のものであるならば假令物質的生活には不自由を感じなくとも自己實現には不自由な社會、従つて決して幸福な理想社會建設の設計案とは稱し得ぬ。

恐らく「社會安寧」「社會的善」の行はれてゐる社會の存在が可能とすれば其社會は吾々の思考、行動、統制、功業等を自由にしかも立派にやつてのける社會でなければならぬ。

併しかゝる人間社會は乃ち人間全てに對して活動を許す様な立派な社會は安定を得たる社會たる事を

若し新社會が存在す可きであれば其社會は一定の害惡例へば戰爭とか貧困とか不平等の存在せぬ社會と云ふよりもつと根本的な人間が眞に生活し得る社會たる事が必要である。乃ち眞の人間の生活を云う點に改造計畫の骨子が存せねばならぬ。労働時間の短縮、均等な機會、分配された労働、一般公事に對する發言權等が與へられる事は萬人の希望する所であらう。併し只それだけでは人間は幸福な平和な生活は決して得られまい。如何に人間の生活が多様な本能や關心によりて決定されてゐるかは心理學者が充分に説明して呉てゐる。

現代社會に存する政治的及經濟的の制度より生れてゐる社會悪は訂正されねばならぬ。併しそれは多數の本能や關心の要求を最少限度に於て満し得るが如き社會に於てのみ訂正され得る。

眞の價值ある社會改造案に於ては常に其中心とならねばならぬ諸事項は、快樂、幸福、余暇、富、勞條件とし、又自己統制と社會的訓練の存する事を必要とする、若し此等の事柄が必要ならば社會改造の問題は社會を構成する所の人間の本能動機に就いて深い洞察を必要とする又之れと同時に社會的安寧が依存する所の社會制度や状態に關する正確なる歴史的知識を必要とする。私が社會改造案の基礎として心理學的の見地乃至社會學的の見地を必要とすると言ふたのは此點である。

若し社會改造案に於て此等の根本的條件が無視され眼目的事象にのみ心を奪はれて其が解決を全部と見て深い人間性を名察せず、又せようとせぬいでいたすに自由とか平等を感傷的に讚美し、産業的組織を改造や政治的組織の變革によりてのみ人類の幸福は生み得られると信するならば、且つ此等の改造案に於て經濟的價值のみが重要視され社會的及び倫理的價值が低く評價されたものであれば、よしや産業的の民本主義、集産主義的取引、利益分配、社會



保険、最低賃銀制度、八時間労働、産業教育、労働組合等々が實行され得たとしても人間は幸福になり得ぬであらう。

將來の理想的社會建設設計圖に於ては之れに住まう可き人間を眞に理解する事が必要である。人間

## 各地教報

### 大阪教報

一月十二日堂開寺にて新年會「開會の辭」京藤山主「人生の苦と樂」川崎部長▲十五日蓮成寺にて立正結社新年會「開會の辭」京師師「二世願」萩原信正「講演後宴會に移り、會員の所感演説等ありて頗る盛會なりき▲二十一日蜂谷宅にて「信仰の要旨」京藤師「本佛の大慈悲」能仁權大領正▲二十二日堂開寺にて「所感」木ノ宮氏、清原氏、本佛救済の力「上田師▲二十七日總永宅にて「宗教の五綱」井口氏「孝養の意義」京藤師何れも盛會多大の効果を奏せり。

### 神戸通信

一月八日午後一時より日の

本子供會開會。講師「金のお池」丹羽先生「可憐な少女アウツナ」中尾先生「近江聖人の幼年時代(二)」大竹先生。中原先生のおもしろいお話があつた。當日は本年最初の子供會なので來會者に年玉を呈した▲十二日午後一時より月例會開會「遺文講義」特命布教師、熊井本光師▲廿六日七時より故大僧正小林日至上人第十七回忌御遺法要嚴修、修法後「小林大僧正の御一代について」大僧正の生時お仕へせし熊井上人の御懇篤なる御講話あり。二月四日午後六時より節分會(はしまつり)執行「修法後遺文講義」熊井本光師▲五日午

111  
はどの點迄其本能から解放され得るか？問題である。それによりて人間の住み得る様な乃ち人間性を眞に満足せしめ得る様な社會に造り上げる事之の事が設計の根本概念とならねばなるまい。

112  
后一時より日の本子供會開會講師講題「三兄弟と羊」丹羽先生「立見峠の狐とトシ」大竹先生「歐洲大戰當時に於ける勇敢なベルギー少年の話」中尾先生▲十二日午後一時より例會と婦人會を兼ね修法嚴修「女人成佛」熊井本光師▲二十日午前七時よりはち婦人會新年大會開會修法後本多大僧正祝下の御親教あり。御親教後福引あり。非常に愉快に散會せり。

## 肺結核治療の秘訣

(第七回)

名古屋夏生醫院 醫學博士 奥田史郎

### 理學的療法の話

理學的治療法は自然療法の補助手段として必要なもの、自然療法を行はずして理學的療法のみでは決して完全な治療法とは云へない。理學的療法の始めはブリースニッツ氏の水治療法が主なるものであつたが學術の進歩につれて水のみに限らず他の大自然の力、即ち空氣、日光、光線、電氣及其他人工的器械をも其對照に引入れて、以つて個体の生理的機能を促進し速に個体の病變部をして自然治癒を營まし、みんとするに至つた。其中必要なものだけを簡單に説明しやう。

### 一、空氣浴

空氣浴は既述の空氣療法とは別ものである。之は患者を裸体にして一定時間外氣中にあらしめる事で、既に古代から行はれたもので百年前フリーフェランド氏が熱心に唱導した所である。此法は主に無熱患者、恢復期患者に行はしめたもので、最初は溫暖の季節から初めて徐々に慣れしめる事が必要である。時間は早晩を可とするも患者によつては日中を選ぶ事もある、而て遂には數時間浴法を續け得るに至る。其効能は主として皮膚の強練で、尙新陳代謝を良好ならしめ殊に神経質の患者に著効がある。但し之も素人が不注意に行ふと不測の害を受ける恐があるから醫師の指導を待つ必要がある。

### 二、日光療法



日光浴は古代から盛に行はれたもので、近年治療上に應用されるに至つたのは瑞西のラクリー氏の效である。日光浴の原理は頭部の直射をさけて裸体の患者をして日光に浴せしめるものである。其術式は種々あるが省略する。元來日光浴は作用が峻烈で發熱、嗜血等其他病勢悪化の危険が多いから醫師の指導を待たねばならない。日光浴を行つて良いものは肺患の既に臨床的治癒に達して後、相當時日を經た人にのみ許した方が安全である。

### 三、水治療法

水治法とは冷温種々の水を或は蒸氣となし或は濃水となし、或は又雨露となし、或は摩擦に用ゐるものである。其主效は皮膚機關の榮養を佳良にし血管運動神經を鍛練し、新陳代謝を増進せしめ以て自然治癒を催進するのである。此中肺結核に多く應用されるものは冷水摩擦と胸部療法とであるが前者は既

に説明したから省略して置く。胸部療法は胸痛咳嗽を緩解し祛痰を容易ならしめ、体温を下げ心機を鎮靜し自覺病狀を佳良にする效がある。但其温度は患者の狀況によつて冷或は温熱と區別する。之には醫師の指圖が必要である。

### 四、電氣及光線療法

人工太陽及びレントゲン線療法はまだ研究の時代にあるものと云ふべきで一定の確説がない。乍ら然或病型の肺結核には有效の事があるのは否定出來ないと同時に他の病型のものには却つて大害がある事も事實である。患者は慎重の態度を持して治療を受ける事が必要である。

### 五、器械的療法

從來人工的に種々の器械を作つて治療を試みたものが多い、然し人工氣胸療法以外には確效あるもの

## 現代語に要譯せる

# 佛說觀普賢菩薩行法經

國友日 斌謹譯

かく我は聞いた。ある時佛は毗舍離國の大林精舍に在せられ、諸の聲聞に告げられた。「これから後三月經つて、我はやがて般涅槃 滅度せられること」するであらう。」そこで阿難尊者は座から起つて、手を又へ、合掌して佛を遶ること三市、胡跪いて敬禮し、語に佛を觀たてまつつて譬をもせず。長老迦葉及び彌勒菩薩も亦座から起つて合掌して尊顔を瞻奉つた。時に三大士は聲を合せて佛に申し上げた。「世尊よ、如來の滅後にどうして衆生は菩薩の心を起し、大乘の經典を修行し、正しき念で、一實の境界を思惟へることが出來ませうか。どうして無上菩提の心を失は

ずに居られませうか。復煩惱を斷たず、五欲を離れずに 諸根（眼耳鼻舌身等の諸根）を清淨にし、諸の罪を滅除くことが出來ませうか。」佛は阿難に告げられた。「諸に聽き、善く之を思念へよ。如來は昔 靈鷲山及び餘の處で、已に廣く一實の道を説き分けたが、今此の處で、復大乘第一の教を修行したいと思ふ未來世の諸の衆生等の爲に、普賢の行を修行したいと思ふ者の爲に、我はやがて其所念へる教を説かう。」阿難よ、普賢菩薩は東方の淨妙國土に生れた。其の國土の相は雜華經の中に已に廣く説き分けたが、



我れ今此の經で復略して説かう。阿難よ、若し僧俗の四衆、天龍等、一切の衆生の、大乘經を讀誦し、修業し、大乘の意を發する者が、普賢の色身、多寶佛の寶塔、釋迦牟尼佛、及び分身の諸佛を見る爲に、六根の清淨を得たいとねがふならば、是の觀を學ばねばならない。是の觀の功德は、諸の障礙を除いて、上妙た色を見ることが出来るのである。三昧に入らずとも、但讀誦受持するだけで、心を専らにして修習し、心と心と相次で、大乘の教を離れないことが、一日から三七日になれば、普賢を見ることが出来る。重い障りのある者は七七日の後に見られる。復もつと重い者は一生に見られ、二生三生に見られる等、過去世の業の報によつて同じでない。

この故に普賢菩薩は身量も、音聲も、色像も無邊であるが、此の國に來やうと思ふて、自在神通の行に入つて、身を促めて小さくし、闍浮提(此の娑婆世界

身をお示し下さい。この誓を作して晝夜六時に十方の佛を敬禮し、懺悔の法を修行し、大乘經を讀誦し、大乘の義を思念へ、大乘を持つ者を恭敬し、一切の人を視ることが佛を見る想のやうであつた。そこで普賢菩薩は眉間から白毫の光を放つた、この時に普賢菩薩の身相は端嚴であつて、三十二相が悉く備つて居た。行者は諸の菩薩を見て身心歡喜び、敬禮して云ふた、「大慈大悲者よ、我を慈念み給ふ故に我が爲に教をお説き下さい」。時に諸の菩薩は音聲を合せて、各清淨な大乘の經を説き、諸の偈頌を作つて行者を讚歎するであらう。これが普賢菩薩を歡する最初の狀況である。

その時に行者がかゝる事を見て、心中に大乘を念ひ(思ひ續けて忘れぬこと)晝夜に捨れなかつたならば、睡眠の中に夢に普賢が教を説くのを見る。覺のやう

の(こゝ)の人は三障が重いから、智慧の力を以て白象に乗つて居る。其の象に六つの牙があり、七支が地を支へ、其の象の色は鮮白であり、身の長さ四百五十由旬、高さ四百由旬である。象の脊に七寶の臺があり、一の菩薩が結跏趺坐して居る。普賢と名ける。身は白玉の色であり、五十種の光があり、諸の菩薩を眷屬として居た。

安詳として徐に歩み、大寶蓮華を雨して、行者(教を修行する衆生)の前に至るであらう。其の象が口を開けると牙の上に池があり、玉のやうな女が鼓を撃ち、歌を唱つて居り、微妙の聲で大乘一實の道を讚歎して居る。行者は見て歡喜んで敬禮し、復更に深遠の經典を讀誦して、十方無量の諸佛、多寶佛塔、及び釋迦牟尼佛、並に普賢等の諸の大菩薩を敬禮して、かゝる誓願を發した。「若し我に宿福があれば、やがて普賢を見られやう。どうぞ、尊者よ、我に色

であつて其の心を安慰めるであらう。そしてかゝる言葉を作るであらう。「汝が讀誦受持する經典の内、この句とこの偈を忘失して居る」。その時に行者は普賢が深遠の教を説くのを聞いて其の義趣を諒解し、記憶し受持して忘れない。日々このやうに努めて其の心は次第に利くなるであらう。普賢菩薩は行者に十方の諸佛を記憶し念持させ、正しい心、正しい記憶にならしめて次第に心の眼が開け、東方の佛の身を見奉ること得せしめるであらう。行者は一佛を見ると復一佛が見え、かく次第に東方一切の諸佛を見奉てまつり、心想が利から遍く十方の一切の諸佛を見奉るであらう。そして心中に歡喜して次のやうに云ふであらう。

(次續)



# 外面的と内面的生活

## 處世の方針

「松柏の操」として、人の堅固な志操を松柏の四時その色を變へないのに譬へ云ふた言葉があるが、人間が處世の方針を立てるにもかくありたい。芭蕉の葉の様に事業を廣げた者は、秋が來ると萎むのが早い、松や杉の様に葉は細くとも夏の暑さにも堪へ、冬の寒さにも枯れずして續くことは人世として望ましい事である。

只々目前の快樂に耽着して、うか／＼と日を暮らす事程恐ろしい事はあるまい。生老病死の苦惱や、其他種々の悩みが、身邊に通つて來るのも知らず、行くべき最後の尖端に至り、始めて「三界は安き事な

し報道の如く生活難よりなりとするならば、私に云はしむれば贅澤より來る生活難であり、又一方志練の薄弱より來るものと思ふ。何故かならば、その心中した人達は相當の地位にあつた人々だから、例へば農學校々長の妻子とか、會社員の一家とか、相當の地置の者が此の道を選ひて居るのである。

成程不景氣の風は此處數年來一層に深刻となつて、生活は難事になつたには相違ないが、それには先づ國民が、不景氣に處する覺悟が、充分であつたらば、かゝる悲惨事も未前に防止するを得たならんと思はれる。

## 皮相的な生活

皮相的手段ではあるが、彼の山下信義氏等が組織して居る「天下に範たる生活同盟」なども外面的には効果があつたものと思ふ。氏の主張は天下に範たる生活者、みんながこう云ふ風に生活したならば、日

## 田久保本誓

し、猶火宅の如し、あゝ」と云ふ事になるのである。  
生活難と母子心中

昨年頃から各地に頻發した、親子心中事件の如きも、平常の理性ある者には考へ得られない事件である。そしてそれは一種の流行ともなつて、本年に入つても長野縣下に於ける母親とその子の心中事件、等々新聞の三面を賑はかして居るのである。

人間が自己の生命を斷つて死ぬと云ふは、よくよくの重大な事件に遭遇せなければ出來るものではないのであるが、今等は等の親子心中の原因に付て見るに、明確な統計を示すわけにはゆかないが、生活難がその原因の大部分を占めてゐる様に思はれる。然

本はどんなに善い國となるだらうと思はれる、よき生活者を見出し、是等の人同志を互に引合せする事に勉めて居る。そして今氏が擧げられた、よき生活者の一例を見るに、先づ岐阜縣の某氏に就てであります。某氏の家事經濟のやり方は、去年の収入で今年の生活費を支辨し、今年の収入を以て來年の生活費に充てるのであります。今日儲けたお金を今日の暮に充てる人を其の日暮しと云ふならば、今月の月給を今月の暮しに充てる人は其月暮しで、何れも五十歩百歩もし一朝何事かあると、直ぐに行き詰つて青息吐息、果ては自ら自己の生命をあやめるとまで行くのでありませう。

然るに某氏のは去年の収入を以て、今年の生活を支へて行くと思ふ、徹底したやり方である、生活意識にめざめ少しく本氣にやりさへしたならば、此の位の事は出來ぬ筈はないでせう。



## 精神の準備

それにつけてもより望まじきは内面的な精神の安住でありませぬ。日頃から精神の修養に心掛けたならばと思ふ。

凡そ人間の生活には外部生活と、内部生活の二方面があります。或は外面的生活、内面的生活と云つても宜しい。吾々は此の兩方面の生活を有して居る。然るにたまには外面的生活のみ没頭して、内面的生活なるものに氣の付かれぬ人が無いとも限らない。青年ならいざ知らず、頭の相應に禿げかかつた人の中にも自分の生活に反省もせず、内面的生活に觸れもせず、終生過してしまふ者あるは實に憐なる事だ。

## 内部的な生活とは

そこで有体に云へば、月給がいくらになつたとか、今度の事業でいくら儲けたとか、綺麗な着物が何枚

ある。一度信仰の生活に入ってから、遠き過去を溯つて見るとき今まで内部的に見えた生活が外部的になり、果ては現實の生に對する拘束すら解けて、生命までもが外部的なものとなるのである。

日蓮聖人が尊き一命をなげ出されて、終身弘法の爲に活動遊ばされたる心境も、畢竟するに確固不動の信仰を把持せられしに依るものと思ふ。

## 信仰生活の幸福

信仰を掴み得た者の幸福は又無限である。それは財産も、名譽も此の生活に入つた者には低級なものとなつてしまふから、そして待つべき道を知つて居るから葉がかない。どんなものでも來らないと云ふものがない、何故かならば、如何にしたら得らるべきかと云ふ道を知つてゐるから……生活難ぐらひに動ずると云ふ事はないのである。

## 日蓮の聖訓

あるとか、云ふ如きは悉く外部生活に屬するのである。斯う列挙して見ると、世人の目指す處の如何に多くの部分が外部生活であると云ふ事に思ひつくであらう。

他の一方面に於ては、家郷にあつては両親健在であり、自分もマメソクサイで良妻も迎へ、子供も出來たし、不正な事も爲なければ後めたいこともなく、他人には餘り厄介かけた覺も無いが、人は相應に世話もして居ると云ふ境遇にあれば、内部生活に満足して居る。即ち内部生活に於て成功者であると解するのが、先づ一通りの解釋であらう。世俗普通の見方はこんなところである。

世間普通の見方は以上の如くであつても、それは決して斯く簡單なものではない。眞の内部生活に到ると、前述の如き内部生活と思はれる生活が、漸次外部的生活である様になるのである。然らば眞の内部生活とは何であるか？それは「信仰の生活」であ

彼のマーテルリンクの「青い鳥」の中に二人の兄妹が「幸福の鳥」を探して各處をさすらひ歩いたが、追に得られず、失望と落膽を以て我が家に歸る時、我が家に飼つて居た鳥が一番の幸福の鳥であつたと云ふ意味の、諷刺的物語がある。世の多くの幸福を欲する人々も、猶又人生の十字街頭に立つて迷へる人々も、右せんか左せんかと思考する前に、自己の内心に反省して、内部的生活を把持せられたい、然らば幸福なる鳥は心の内に内在するであらう。聖語に曰く。

譬へば石の中に火あり、珠の中に財あるが如く、我等凡夫は睫のちかきと虚空の遠きとは見る事なし云云。(十字御書)

睫が見えぬから無いのではない、鏡に照せばあるのである、我々の内部生活も信仰の鏡によつて光を見出さぬばならない。上の聖訓と合せみて、私が嘗て讀むだユース、オブ、ライフと云ふ事に、實に旨



いと思つた一句があつた。それを載せて此の文を結びたい。

海岸に遊んでゐる子供が「こんな奇麗な貝殻よ、こんな見事な海藻よ」と拾つて喜んで居るが目の前に横はる大海には數等奇麗な貝殻も、更に見事

な海藻も無數に有ることに氣が付かないでゐると同じ様な事が人生にも澤山ある云云。  
おぼろげながら、私の云はんとする所を云ふて居ると思ふ。要するに信解は体得すべきものの、修得すべきものの、外に形容すべき辭がない。



### 猿 龜 物 語

長谷川義一

ある森の中に、一匹のお猿さんが棲んで居りました。毎日森の中で楽しく遊んでをります。お腹が空けば、お味さうな木の實を食べ、喉が渴けば、山から湧いて出る透きとほつた水を飲みます。さうして、このお猿は、大變に利口者で

ありました。  
また、この森の中には、小さなお池がありました。その池には、ギンと云ふ龜と、ゲンと云ふ龜が棲んで居りました。  
ある時、ギン龜は、遊びに出かけました。すると、樹の枝の上

猿が一生懸命になつて、木の實を喰べてをりますからギンは下から「お猿さん、今日は」  
「おや、これは、お池のギン龜さんですか、今日は、太變に好いお天氣ですね、まあ、こゝまで、あがつていらつしやい」  
「駄目ですよ、私しや、木のぼりは出来ませんよ、早く、下りていらつしやいよ」  
「さうだなあ、じや、僕が下りて

行かう」

猿は、木から下りて來ました、そして、

「僕は、一人ぼちで、淋しいから、これから毎日、二人で遊びませうよ」

「それは、面白いね、これから、お友達になりませう」  
猿とギン龜は、お友達になつて毎日、森の中で遊び廻りました。

ところが、ゲン龜の方は、毎日ギン龜が、お猿と一緒に遊んでをりますから、お池に、一人きりでちつとも、面白い事はありません。「この頃は、ギンは、私と遊んで呉れない、あゝ、つまらない」

と怒つてばかりをります。夕方になると、ギン龜は、遊びくたびれて、足を引きすりながら歸つて來ました。

「なんだ、今頃歸つて來て、私しや、一人で、淋しくて仕様がないうよ、これから、猿と遊ぶのは、止めてしまへよ、なんだ、尻赤の猿なんか、こん度、會つたら、怒つてやるから」

「そんなことを云ふものぢやないよ、あのお猿さんは、利口だから遊んでをると、それは面白い事を教へて呉れるよ」  
龜は、お互に、口先で喧嘩を致しました。

夜になりました。龜は、くたびれたから、早く寝てしまひました。すると、夜中に  
「あ痛い、あ、あ、苦しい」  
とゲン龜は、悲しい聲を出して泣きました。ギン龜は、その泣き聲を聞いて、  
「どうした、どこが痛いんだ」  
ゲン龜は、俄に、病氣にかかりました。ギン龜は、それからは、毎日お池に居りまして、薬を飲ませたり、痛いところを擦つてやつたりしてをりました。

ゲン龜は、病氣で、苦しいのですが、ギン龜が居りますから、氣がしつかりしてをりました。が、それでも、



「私の病氣が癒れば、きつと、又猿の奴のところに行くに極まつてるよ、今は、仕方ないから居るんだ、なんとかして、猿を殺してしまふ工夫はないかしら」と寝て居て考へました。

ゲン龜は、寝ながら、色々な事を考へて見ました。

「こう仕様か、駄目だ、あゝ仕様か、駄目だ、あつ、うまい計略がある」

ゲン龜は、何か考へ出しました、直ぐ、ギン龜に向つて

「私の病氣は重くて、とても、助からない、あ痛い、あ、苦しい」

「そんな氣の弱いことを云ふのはやめろよ」

「私しや、寝ていて考へたが、この病氣に、よく利く薬が分つたよ」

「なんだ、言つてみな」

「それは、猿の肝、どうか、直に、猿の肝を飲ませてよ」

ギン龜は、困つてしまひました。

森には、一匹の猿しかをりませ

ん、その肝を、ゲン龜に、飲ませれば助かるが、さうすれば、猿は

死んでしまうから、遊ぶことは出来なくなりませう。

しかし、永い間、お池に一緒に住んで居つたゲン龜のことであるから、色々考へた末に

「ゲンを助けてやらう、けれども、

あのお猿さんは、利口だからなあ、どうしたら、肝が取るだらう、まあ、騙して、池に引張つてさやう」とギン龜は、猿の處に行きました。

お猿さんは、この二三日龜が来ないので、友達が無くて淋しいのですから

「ギン龜さん、よく来たね、随分待つたよ、さあ、遊ばう」と大喜びです。

「今日は、お池に遊びに来て下さい、大變お味い御馳走をこしらへましたから、お迎へに参りました、さあ、参りませう」

「それは有難たう、それでは、すぐ参りませう」

「どうしたんだい、早く下りてこないかい」

「馬鹿、誰が下りて行くかい、お前が僕を騙すから、また、僕がお前を騙したんだよ」

「あゝ、しまつた」

「肝は、樹の上になんかにありやしないよ、僕のこゝにあるんだよ大馬鹿野郎」

と胸の下の肝のある邊に、指を當て、云つてをりました。

人をもつてをると、かへつて、考へをもつてをると、かへつて、自分の方が騙されることがあるものです。

（「生經卷第一傳説雜談第十」からこの猿龜物語を作つて見ました）

猿は、何にも知りませんから、喜んで龜の後からついて行きました、すると、池に行く途中に川が有ります、それを渡らねば池に行くことは出来ません、その川の岸にくると、お猿さんは

「僕には、この川は渡れないよ」

「大丈夫私の脊中に乗りなさい」

猿は龜の脊中に乗つて、川の最中でも話しながら

「一体、今日の御馳走は何だい」

「實はね、御馳走するのは嘘なんだよ、ゲンが大病で、猿の肝が飲みたいと云ふから、お前を騙して連れて行つて、殺して肝を貰うんだよ」

ギン龜は、こゝまで連れて来たから、もう大丈夫と思つて、うつ

かり嚙舌つてしまひました、猿は、これは大變と、心の中で思ひました。お猿さんは、利口でありますから、少しも驚かないで、

「そんなことなら、なせ、早く言はないのだよ、御馳走だとはかり思つたから、今日は、相憎く、肝は、樹の上に、忘れちやつたよ」

「そりや、困つたな」

「仕方ないから後へもどつて、樹の上に取りに歸らうよ」

「面倒だけれども、さうするより仕方ないね」

川の最中から、また後もどりして樹の下まで来ると、猿は、直様樹ののぼつて、もう、下りては参りませぬ。



# 南洋の孤島より

田中宣正

母國を離れて南洋の小島に着いて第一信を送つてから約半年になりました、其の間に民間及び官達方面にも色々お話しして見たが案外共鳴して呉れる人が少ない夫れには斯うした事情がある内地の現状は懸けはなれた習慣云々か或は弊風云々か誠に厄介千萬なものがある先づ當地に居る邦人の大部分は護手で要主義を夢見て來島した人が多し事此の人達は官憲にうまく取りついて其の力を利便して金を儲けようとする氣風を養成したと見らるゝ事、其れも何事を計費するにも先づ第一に友片長を請を出す、もしも友片長が頭を横に振つたらどの様な計畫でも先づ不成功に終る私は吾日進主義の宣揚は邦國の隆昌と世界人類の福祉とを期するものなれば勿論現代の世人は賛成して呉れると言ふ確信の下に高橋將軍と協議の上、後援者芳名録を作り一面には趣意書を頒布し、官達には官有地無償貸下けを請願し件而一般の有志者より寄附

金募集許可願を提出して疾風迅雷的活動を開始した、先づ第一に後援者として友片長と地良作氏を訪ねて記名調印を乞ふた處曰く御趣旨には誠に賛成であるが私は幾多の未携手形の發行者である即ち東本願寺布教所の後援者であり曰何日何故に未携手形整理の上にて年々云々先づ第一は美事失敗第二に法院長奥津一郎毛を訪問右同様の要求をした所曰く目下サイパン島は極度の不景氣に襲れて居るから其の時機でないと思ふ故に暫く時期を待たれたし年々云々は是れも美事失敗に終つた。退いて考へて見た、當地の官憲の頭株が何故に反對するか判つた(但し今之を言明はせぬ)少々奇なる思をしたから直ぐ其の足でサイパン病院長醫學博士栗本又五郎氏を訪問して其の意を述べた、同博士は非常に喜んで共鳴し直に署名調印をして呉れました其後同博士の所へ時々訪問して信佛話に夜も更して歸る事が多い一方には高橋將軍あり一方には栗本博士

ありで龍虎の後援を受けて居る感じがするが何分にも目下土地が容易に手に入らぬ事と寄附金募集許可願が八月二十八日附を以て南洋廳長官横田那野閣下より、願出の件詮議相成難し、この通告を受けた、一方民間の有志者藤川隣太郎氏太田貞藏氏外十數名の後援者を得て居るが何分にも寄附金に據なければ出來難き事情になるので閉口一服の姿である。布教方面は好機は逸せず毎月一回の乃木會は勿論宗教的儀禮の度毎には法話をいたして居ります、此頃では野外講演を行つて居ります、上弦の月下に立つて熱語を捧げて集つた子供(多くは島民の小兒で邦人の小兒は毎度五六名位)に日本のお伽はなしをして夫れから佛教講演を始めますが割合によく聞いて呉れます、赤い宣傳マスキ日丸に南無妙法蓮華經の題目を大書したマンドを掲立て、行きますさ島民の子供から坊さん面白い話をして下さいと言はれて涙を流す事もあります。警務課の係りから大勢の人を路傍に集めるから願書を出せと嚴命で一通提出いたしました、内地では斯様な事迄干渉がなかつたが新變れば品變るさやら御参考まで。

## 佛國書

佛敎注法三關スル件

- 一、主旨 信仰増進及思想善導ノ爲メ
- 一、期間 毎月一日より十四日ニ至向フ十四日開午後七時ヨリ全九時迄但風雨及事故アル場合ハ中止ス

一、場所 中央南洋貿易株式會社サイパン支店前附近、南中村商店附近、北、山口商店附近路傍

一、目標 日ノ九三願目ノ提灯(マンド)右之通り及御届候也

昭和二年 月 日  
サイパン島北カラパン通り三丁目  
顯本法華宗假教會所  
田中宣正

サイパン島廳長和地良作殿

斯様な手数の懸る宣傳をして居りますが前にも申送つた通り餘程腰を落ち付けて根強い布教でなければ駄目と思つて居ります持久職でなければ覺束ない、今の所では第一職は敷れたから第二職で何かうまくやりたいと思ひます、自分には決定した策費計畫もあるが目下高橋將軍も内地に歸つて居るから歸島の

## 各地教報

二本松報 二月六日午後安達郡大平村小學校に於て大平村青年團及び處女會の爲に

上萬事を相談して除るにせりか、り度いさ考へる、以上述べました様な事情で官憲の方から色々の故障が起つて來るならば單獨で實行するだけの準備を要す。正法宣傳には色々の覽の起る事が當然なので謙向御承知の上で有りますから少しも驚きませぬ事來て始めて正法と思はれませう、本月初旬の日光丸で東本願寺の布教師も來島せられました、次第に私の信仰も試験を受けます、登き教職の前に計れて其私の望も達せられる事と法悦歡喜の心が躍ります。佛様の御加護で家族一同協力して呉れます亦た至極達者であります皆様は喜んで頂きます、目下當地の氣候は室内八十二三度位屋外朝夕は殊に涼しく誠によい心地です日の出六時三十分日没六時であります、又々何か面白い通信を致します。

遂に東天を拜して皆様の御健勝を祈ります  
昭和二年十一月十三日夜半  
下注の月下涼風を受けて 宣正歸す

## 津山教報

一月元日本蓮寺にて國禱法

會講演「眞善美の生活」山主大川孝準師△二日弘通所にて婦人會新年宴會「衛生講話」千田經女史「信仰講話」妹尾經時前廳長「眞善美の生活」大川孝準師△九日津山高等洋服裁縫女學校始業式後「一年の計は元日にあり」大川孝準師△実行を弘通所にて、毎夜△十六日津山高等洋服裁縫女學校にて「善の生活の根本義」大川孝準師△二月二日橋小學校にて村民講話「現代人の開闢すべき二方面」能仁大僧止「現行實行の生活」大川孝準師△三日弘通所にて「事實の信仰」能仁監督布教師△十一日津山高等洋服裁縫女學校「忍耐は婦人の美德」大川孝準師



大國柱會正 本多日生現下題字  
頭本法華宗管長 田中智學先生序文  
井村日威現下序文

### 殉教第二の日蓮

三六版美装二百八頁  
定價一冊金七十五錢  
(送本料金八錢)

本書は顯本法華宗開山日什大正師、不惜身命日經上人並に日仁、日淨等の殉教史譚にして、その詳細をつくし會つて世に現はれざる史實譚であり、その面白きことは講談よりも優れり。本多日生大僧正書簡に「近著第二の日蓮出來早速御送り被下難有存候、不取敢大拜見御努力感謝の至に候、本宗の爲確かに大切の出版と存深く敬意を表し候云々」田中智學先生序文に「什師公明、經師の剛毅、則て以て宗徒の氣骨と爲すべし……また井村管長の序に云く「己に爲さるべくして爲されざりし史傳今君に依つて爲さる、余の悦び何物か是に過さん。一讀するに行文流麗考證的確、聖者の面影眼前に彷彿し、殉教の跡躍如として思はず漸汗澁の如し云々」以て内容の一斑を知るべく、日蓮主義者たる者一讀すべき好著。

發行所 京都市東區三條上ノ 平樂寺書店  
千葉縣長生郡二宮本郷村 東文社  
東京市東區大塚一三〇六五番  
千葉縣長生郡二宮本郷村 東文社  
東京市東區大塚一三〇六五番

### 社寺建築及臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なる水蓄不  
充分なる檜材は于利狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社寺工務所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町 社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原 社寺工務所福岡支所

大阪市西區市岡町七十九番地 社寺工務所大阪支所

(電話二二三〇番)

電話二二三〇番

電話二二三〇番

電話二二三〇番

臺灣檜材六六特選  
一、耐久防腐  
二、蟻害絶無  
三、香氣清楚  
四、木質堅緻  
五、理整然木  
六、木高澤色

文學士 中川日史著

### 體系的法華經概觀 下卷

目次

- 第三篇 本門
  - 第八章 本門の大綱
  - 第九章 一經の梗概
- 第四篇 結論
- 第十章 大藏全典の起盡と法華經
- 第十一章 要文の解釋

定價 金貳圓八十錢

發行所 東京市神田區神保町貳 研究館  
東京 東京堂 大阪 寶文館  
東海堂 盛文館

統一價	
一冊	金貳拾錢
半冊	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
送料共	送料共
金前	金前
事之	事之

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾
一頁	金拾五
半頁	金九
四分一頁	金五
送料共	送料共
金前	金前
事之	事之

昭和三年二月廿四日印刷納本 (第三百九十六號)  
昭和三年三月一日發行

不許複製

編輯兼 國友日斌  
印刷人 鈴木日雄  
印刷所 三益社  
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
名古屋市東區千種町字五反田五二番地  
名古屋市東區田代町字城山七十七番地  
編輯所 統一編輯局  
電話 東京五〇七一番  
電話 名古屋一〇八一九番





次 目

信心と精進……………	本	多	日	生
観音賢菩薩行要譯……………	國	友	日	斌
菩薩行に就て……………	本	多	日	生
釋放者と社會……………	吉	田		
聖訓摘要……………	本	多	日	生
聖德記念繪畫拜觀記……………	本	多	日	生
小笠原島法蓮寺開堂供養記事……………	松	野	慶	三
勇敢なる孤兒……………	古	田	昂	生

第三十三號 第三十四年四月號

